

第3学年1組 外国語活動学習指導案

第2校時 場所 視聴覚室 授業者 福永真紀子

1 単元名 Unit 7 This is for you. ～オリジナルグリーティングカードでもっとなかよくなる～

外国語に慣れ親しんで約半年が過ぎた子どもたち。クラスメートや教師・ALT という相手に対して、使える言語を子どもたちなりに使ったり、伝え方を工夫して表現したりしようとする姿が見られている。そのような時期に副教材では「色や形を集めてカードを送る」という単元が設定されている。子どもたちにとってはたのしむことができる内容ではあるものの、カードを渡す相手の設定や大きさ・色・形の英語表現に慣れ親しむ過程をさらに工夫することで、伝え合う内容をより思考しながらコミュニケーションを図ることができるのではないかと考える。

本実践では、単元序盤に外国で渡すカードを知ること、日本の年中行事等で渡す葉書・手紙との文化や習慣が異なること、どちらの国でも相手に喜んでもらうためにつくっていることに気付かせる。そして、クラスメートに「ありがとう」の気持ちを伝える“Thank you card”を作ること、渡したい相手に合わせてカードの種類や内容を考えることを提案していく。また、店員と客になりきって色や形のカードを集める活動を取り入れる。客側が欲しい大きさや色・形がなくとも「これはあるけど、使ってみるのはどう？」と店側から提案することで『『それいいね』と言ってもらえた』『カードで友達を笑顔にできた』『カードをもらって嬉しかった』という、コミュニケーションを通して喜びを感じられる子どもの姿を目指したい。

2 単元について

- (1) 本単元では、日本と外国の葉書や手紙・カードを渡す文化や習慣の違いに気付くことをねらいとしている。また、欲しいものの色や形、大きさについて“What do you want?” “(大きさ)(色)(形) please.” “Here you are.” “Thank you.”などの表現を使って尋ねたり答えたりして伝え合う活動を通して、それらの表現に慣れ親しむこともねらいとしている。色や形を集める活動では、店と客になりきってやり取りをする活動を設定する。そうすることで、新しい英語表現やこれまで学習してきた英語表現、ほしいものを伝える伝え方を駆使しながらコミュニケーションを図っていくことができるようにしたい。
- (2) 子どもたちはこれまでに、Unit 6 のアルファベットショップの活動で“Do you have an A?” “A please.”などの表現を使いながらやり取りをしてきている。本単元では大きさ・色・形という3つの表現を使いながら欲しいものを尋ねたり答えたりする。また、やり取りをしている中で“How about ---?” “Ok.” “Here you are.” “Thank you.”と客側に提案することで、友だちが欲しい色や形がなくともコミュニケーションが成立したり、自分の思いが伝わったりすることができる場面を生み出すことができると考える。
- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。(調査人数：36人)
 - ① 外国語活動に対して「思いついたことにとりかかって、その行動をたくさんするからたのしい」「色んな言葉を知れて面白い」「友達とやり取りをしてもっと仲良くなることができるからたのしい」など、肯定的な子どもが多い。
 - ② 葉書や手紙、カードを送ったことがある子どもが全体の6割ほどいる。そのうちのほとんどが年賀状を送った経験がある。少数ではあるが、クリスマスカード、「いつもありがとう」の気持ちを書いたお手紙を渡したことがある子どももいる。

3 単元の目標

- (1) 日本と外国でカードや手紙を渡す文化や習慣の共通点・相違点に気付き、欲しいものの尋ね方・伝え方の表現に慣れ親しむ。
- (2) 相手に伝わるように工夫しながら、自分や友達が欲しい大きさ・色・形を伝え合う。
- (3) 自分や友達が欲しい大きさ・色・形を相手に正しく伝えようとする。

4 指導計画（5時間取り扱い）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	1 単元の学習の見通しをもつ。	○ 日本で年中行事の挨拶に使われる葉書や手紙を子どもたちの日常から想起させ、外国で使われているグリーティングカードをALTから紹介してもらうことで、日本と外国の文化や習慣の共通点・相違点に気付くことができるようにする。 ○ 「外国にあるようなカードを自分たちも作ってみたい」という子どもの思いや願いを聴くことで「クラスメートや渡したい人にカードを作って渡す」ということを提案する。	【知】日本と外国の文化や習慣の共通点や違いに気付いている。 （振り返り）
2 3 4	2 オリジナルグリーティングカードを制作する。 (1) カードを渡す相手や種類、内容などを考える。 (2) 欲しい大きさ・色・形のステッカーを渡したりもらったりする。	○ カードを渡す相手や種類、カードに添える言葉を考えさせることで、相手に思いを寄せてカードを作っていく思いを高めることができるようにする。 ○ 大きさ・色・形は子どもたちが描いて用意することで、作っている途中でも形とその言い方に慣れ親しむことができるようにする。 ○ 店員と客という立場のやり取りでは、困ったことや分からなかったこと、工夫して解決したことなどの表現を共有することで、表現や伝え方に着目してやり取りができるようにする。 （本時4／5）	【知】色や形、大きさの表現や欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しんでいる。（観察） 【思】【主】店員・客の反応や伝えたい内容にや方法応じて、表現を工夫している。／しようとしている。 （観察・振り返り）
5	3 自分がクラスメートに作ったカードを渡し、単元の学習を振り返る。	○ クラスメートに作ったカードを渡し合う活動を設定することで、友達に喜んでもらう達成感やもらった嬉しさを味わうことができるようにする。 ○ 単元全体の学びや思考の変容を言語化させることで、次の学びに生かすことができるようにする。	【主】学習を振り返り、次の学習に生かそうとしている。 （振り返り）

5 本時の学習

(1) 目標

オリジナルグリーティングカードを作るために、カードに使いたい大きさや色・形を尋ねたり答えたりして集める活動を通して、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 前時の学習を振り返り、本時の学習課題をたてる。	○ せっかく作ったステッカーが売れなかった。 ○ アルファベットショップのときは結構集まったんだけど、今回は欲しい大きさと色と形があるから、それに合ったステッカーがなかなか見つからない。 ○ お客さんがたずねて来ても “No, sorry.” ばかり言っていて少し悲しい。ずっと断ってるもん。 ○ ステッカーが売れるためにはどうしたらいいかな。 ○ どうしたら欲しいステッカーが集まるかな。 ○ “Big white rectangle please.” って完璧に言えるようになりたいな。
10	2 ステッカーを集めるためにどのように表現すれば集まるか考える。	○ 大きさと色と形って3つあるから「色は違うけどこれはどうですか？」って言えないかな。 ○ Jason 先生たちが尋ね合ってるときに “How about--?” って言ってるけど、ここでは使えないのかな？ ○ 先生に意味を聞いてみたら「(これは) どうですか？」って意味なんだってよ！使えそう。 ○ 作るカードのデザインによっては、欲しいものではないステッカーでも “Ok.” って言ってもらえるかも。 ○ 近くの友達と一緒に言い方の練習をしてみよう。そしたら次のお店屋さんで、お客さんに “How about--?” って提案できそう！
20	3 友達とやり取りをしながらステッカーを集め、オリジナルグリーティングカードを完成させる。	○ よし、えーっと『形シリーズ』を見て… “Big white rectangle please.” 言えたぞ！ ○ “What do you want?” ん～…。 “Red” はないけど “Blue” はあるから… “How about this one?” ○ “Thank you, see you!” やったー！売れたぞ！
10	4 本時の学習を振り返る。	○ 「これはどう？」を言ってみたら「それもあるのか。その色でも合うかも？」と考えてもらえました！ ○ はじめは大きさと形と色3つを言うことができなかったけれど『形シリーズ』を見たり何回も繰り返し言ったりしたら言えるようになって嬉しかったです。 ○ 今日は初めて「これは “No, sorry.” だけど “How about---?”」を使ってみました。そしたら「その色でもいいな」と言ってもらえて “Ok.” と渡せたので、売れてよかったなと思いました。



子どもたちはお店屋さんの活動をたのしみつつも「なかなか欲しいステッカーが集まらない」「(大きさ・色・形が) 3つあるからそれに合ったものを渡すことができない」という思いをもっています。本時では客側に提案するという新しい表現方法を見いだしたり考えたりし、カードの完成を目指します。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 前時の「ステッカーが売れない」という店側と「ステッカーがなかなか見つからない」という客側の困り事の振り返りを取り上げ、具体的な場面を想起することができるように、教師がその時の状況を話したり、実際にその場面を子どもにさせたりすることで、それぞれの立場の困り事を全体で共有し、表現や伝え方について考えることができるようにする。
- 「お客さんがたずねて来ても“No, sorry.” ばかりで悲しい」という店側と「店を探しても欲しい大きさ・色・形のステッカーが見つからない」という客側の立場の発言に対して、どのようにすれば自分が欲しいステッカーを渡したり、集めたりすることができるのかを問うことで「もっと工夫ができそうだ」「こんなふうに言ってみたら“Ok.” と言ってもらえるかも」といった発言を引き出し、表現の工夫に焦点をあて、本時の課題を設定する。

友だちが欲しいステッカーがなかったときは、どのように伝えたら売れるようになるだろう。

- 「英語表現を忘れてしまった」という子どもには大きさ・色・形の表現を書き留めた模造紙を見ながら想起することを促し、「“No, sorry.” ばかり言っている」という店側の子どもたちに対しては、前時で「大きいのはないけどこれはあるよ」「同じ“Yellow”で他の形はあるよ」と日本語で伝えていた子どものやり取りを全体で共有することで、その英語表現について考えることができるようにする。

【教材・教具】

- 大きさや形、色の表現を書き留めた模造紙
- 形ステッカー

- 活動に入る前に、提案する表現“How about---?”を使いながらやり取りの練習をその場でやってみる時間を設定することで、大きさ・色・形の発音をもう一度確認したり、次の活動で自信をもってそれらの表現を使ったりすることができるようにしていく。

- 子どもたちが活動する中で困ったときには、子どもの伝え方の工夫を黒板に残しておき、それぞれの立場でどのように提案したり提案を受け入れたりしているのかを見取り、価値付けすることで、自分が行った表現や伝え方のよさを自覚することができるようにする。

【評価】

- 大きさや色・形の表現を使って、欲しいものを尋ねたり答えたり、言語表現・非言語表現を用いたりするなどの工夫を行いながら、やり取りをしようとしている。
(行動観察・振り返り)

- 活動の後「友達から言われた色はなかったけれど『これはどう?』と言ってみて『それもいいな』と言ってもらえたことはあったか」と子どもたちに問うことで、活動を振り返り工夫したことが分かるように全体で共有する。
- 振り返りでは「やり取りの中で気付いたこと」「やり取りの中で嬉しかったこと」について振り返りを記述することと「言えるようになった大きさ・色・形」をタブレットの音声機能で録音するよう促す。
- 互いの学びや気づき、活動時の表現のよさや工夫などをいくつか交流し、自分の表現や思いと比較することで、友達の表現や考え方のよさ、違いに気付くことができるようにする。